

解答・解説

Basic 1

問1 aイ bウ

問2 終止形 いづ 活用の種類 オ

問3 エ

問4 なん

問5 十二月二十一日

問6 エ

問7 Aある人 B県 C四年五年

問8 (例)一日中、あれこれと忙しくして大騒ぎをしているうちに、夜が更けてしまった。

問9 イ

解説 問1 助動詞「なり」には、次の二種類がある。

断定の助動詞「なり」…体言や、活用語の連体形に接続する。
伝聞・推定の助動詞「なり」…活用語の終止形に接続する。
(ラ変型の語は連体形に接続する。)

aの「の」は、サ変の動詞「す」の終止形に接続しているのだから、「…と聞いている」という意味の伝聞・推定の助動詞である。一方のbの「なり」は、サ変の動詞「す」の連体形「する」に接続しているのだから、「…である」という意味の断定の助動詞である。

問2 「しはす」と「しはす」と読む。「しはす」と読む。「しはす」と読む。

よ」と活用する下二段活用動詞である。

問3 動詞「くらぶ」(比ぶ)には現代語の「比べる」が持つ意味のほか、「親密に交際する」という意味がある。

問4 「なむ」と表記されることが多い係助詞。「なむ」と書いても「なむ」と発音する。強意の係助詞には他に「ぞこそ」がある。

問5 「しはす」は「十二月」の異名。「二十日あまり一日の日」という言い方は女性特有のものである。『土佐日記』は、紀貫之が女性に仮託して書いた作品だということを出そつ。

問6 「かれこれ」は、「こ」は人称代名詞で「あの人やこの人」という意味。「知る知らぬ」は「知る人知らぬ人」の「人」が省略された表現。「送り」は見送りのこと。

問7 「年ころ」は名詞の「年」に時間の経過を表す名詞「ころ」が濁った「ころ」がついた形で、「長年」。これまでの何年かの間。という意味。本文中に「ある人 県の四年五年はてて」とある。『土佐日記』の作者・紀貫之は、九三四年の十二月二十一日に任国の土佐の国を出発して、五十五日後の九三五年二月十六日に京に到着している。当時の国司の任期は四年であったが、貫之はさまざま準備期間も入れて五年近くは土佐の国で過ごしたと思われる。

問8 「日いきり」は「一日中ずっと」という意味を表す。古語の「のしる」の原義は、現代語の「のしる」(罵る)とは違って「大きい声や音を立てる」意味だということに注意しよう。送別の宴でにぎわっていたわけである。

問9 「女もしてみんとするなり」とある。『土佐日記』では、「この」女」の正体は明らかにされていない。本文中の「ある人」という言い方から、紀貫之に仕えていた女性を想定することができるだろう。

2 問1 ア・イ「順不同」

問2 (1) ウ (2) イ

問3 エ

問4 イ

解説

問1 「たひらかに」は、形容動詞「たひらかなり(平らかなり)」の連用形。「たひらかなり」には、「高低がなく平らかな様子。穏やかである。無事である。」といった意味がある。線 の「たひらかに願立つ」の部分を読むとき、「たひらかに」が「願立つ」を修飾していると考えた場合は、「たひらかに」は「心静かに」といった意味になる。もう一つの解釈の仕方は、「たひらかに……」と「……」の内容が省略されているという読み方である。「……」の部分には、例えば「京にたどり着けますように」などの内容を補つことができる。

問2 (1) 「馬のはなむけ」は、「旅に出る人を送るとき、馬の鼻先を旅先の方

方向に向けたことから)旅立つ人の道中の安全を祈願し、贈り物として送別(せんべつ)の宴を開いたりすること」をいう。現代の「饞別」という言葉に、この風習をつかがい知ることができる。「藤原のときさね」がどのような人物かは定かではないが、線 の直後の表現から、彼が送別の宴を催したことがわかる。

(2) 『土佐日記』の作者は、線 の部分では冗談(冗談)を言っている。貴之(きよゆき)一行の帰京の旅は、土佐の国から京まで船で行くものであるから、陸路の旅とは違って馬は必要としない。それなのに「馬のはなむけ」をしてくれた、と作者はおかしがっているのである。

問3 「上」「中」「下」は、身分の上下を示すときに用いられることがある。

「この」「上中下」とセットになっている場合は、「身分の上下を問わず」といった意味になる。国司が京に帰るのに際して、身分に関係な

く大勢の人々が宴に加わったというのである。

問4 「あやしく」は、形容詞「あやし」の連用形。「あやし」の原義は「不思議だ」ということだが、そこから、例えば身分の低い者たちが大騒ぎする様子に対しても「あやし」という形容詞を用いるようになった。身分が高い人にとっては、身分が低い人々の振る舞いは当時は「あやし」(不思議だ)だったのである。線 の直後に「潮海(うしほ)塩海(しほ)」とあるが、これは塩分を含んでいる普通の海のこと。塩分は食べ物を腐らせない働きをするが、宴席に加わっている人たちは「あざりあへり」という状態である。動詞「あざる」には、「(食べ物が)腐る」という意味がある。「塩海」のそばで「腐れ合っている」のは、何とも不思議だという、『土佐日記』の作者の冗談路線が、線 の部分と同様に発揮されている場面である。

1

問1 師走

問2 イ

問3 わたる ののしる

問4 (1) (例) 男の書くものであると聞いて日記といつものを、

女である私も試みてみようと思つて書くのである。

(2) (例) 当時は「女文字」と言われていた仮名を用いることによつて、漢文とは異なつた日記文学を作ろうと考えたから。

問5 イ

問6 (例) 数年来、親しく付き合つてきた人たちとは、特に別れづらく思つて。

解説 問1 月の異名を確認してあげよう。

一月 = 睦月	二月 = 如月	三月 = 弥生	四月 = 卯月
五月 = 皐月	六月 = 水無月	七月 = 文月	八月 = 葉月
九月 = 長月	十月 = 神無月	十一月 = 霜月	十二月 = 師走

月の異名は和文脈(当時は主に女性が書いた)でよく使われた。

問2 「子・丑・寅・卯・辰・巳・午・未・申・酉・戌・亥」という「十二

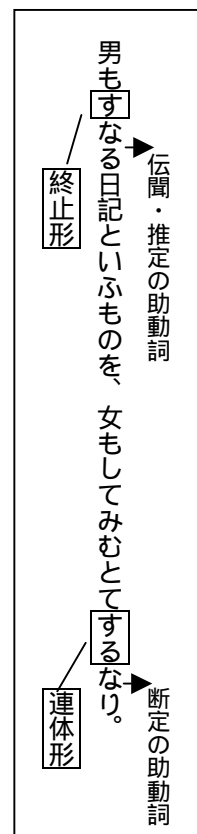
支」は時刻の表示としても用いられていた。「戌」は午後八時の前後二時間ほどの時間帯を指している。

問3 「わたる(渡る)」「は、一方から他方へ移動する」というのが原義。

「ののしる」は、大きい声や音を立てるといっのが原義で、古代では現代語の「ののしる」=しかる。どなりぢぢりす。「ののしる」の悪い意味合い

はなく使用された。

問4 (1) 「伝聞・推定の助動詞」なり」と断定の助動詞「なり」との区別に注意して訳す。



(2) 『土佐日記』が成立した九三五年ごろ以前にも、男性貴族たちによつて日記や旅行記が書かれていたが、すべて漢文によるものだった。当時(平安時代の前半)は、仮名文字は「女手」と呼ばれ、仮名を公の場で自由に使えるのは女性だけだったのである。ところが『古今和歌集』が成立して(九五年)、表舞台で仮名文字が力を持つようになった。『古今和歌集』の撰者の一人である紀貫之が仮名文字を使った日記を書こうと試みるのは自然の成り行きだったのである。それでも貫之は日記を、いかにも女性が書いたかのように装つた。「男性の日記は漢文で」という当時の常識を覆すのはたいへんだったのである。

問5 「由」は、「こは」「いきさつ。事情」などの意味。「男もする……」から始まる『土佐日記』の冒頭部分は、一種の「執筆宣言」だから、「その由」の内容は、ウの「任国を出発するときの様子」だけではなく、イの「京への旅の様子」、つまり旅全体のことだと考えることができる。

問6 「年」は、「こは」「ある人」が任国の土佐にいた「四年五年」ほどの期間だと考えることができる。「くは」は動詞「くは」の連体形。「くは」は動詞「くは」の連体形。「くは」は動詞「くは」の連体形。

があることに注意しよう。

問1 (1) ウ (2) 見えざる

問2 (1) イ (2) エ

問3 ア

問4 ウ

問5 (1) 馬のはなむけ (2) ウ

解説

問1 (1) 打ち消しの助動詞「ず」の連体形「ざる」に断定(伝聞・推定)の助動詞「なり」が接続した「ざるなり」「は」さんなり」と撥音便化することが多く、その場合、「ふつうは」「ん」が表記されない。

(2) 線 の直後に「見えざなり」とある。この部分も「見えざなり」の「ん」が表記されていない形で、表記されていなくても「見えざなり」と発音する。

問2 (1) 「守」は国司のこと。「守から」の「ら」は「がら(柄)」とも書く接尾語で、現代語の「人柄」「お国柄」などの「柄」と同じ。「守から」で「国司の人柄」と訳すことができる。

(2) 「守からにやあらむ」「は」「国司の人柄によるのであろうか」と訳すことができる。線 の直後の「国人の心の……見えざるを」の部分は、一種の挿入句である。線 の部分は、この挿入句をはさんで、「心あるものは恥ぢずになむ来ける」に係っている。

問3 「いまは(今は)」「は」今となつては、「こつなつた以上は。」という意味。国司はそれなりの権力を持っていたが、土着の人々の中には、離任して京にもどる国司の「機嫌をうかがう必要はないと考える者がいてもおかしくはないのである。

問4 「国人の心のつねとして、『いまは。』と見えざるを」の部分に注目する。「国人」＝土着の人。その国の住人。「の多くが離任する国司にあいさつをする必要がないと感じているとしたら、そのような雰囲気の中

で国司にあいさつに参上するためには、ある種の勇氣が必要となるはずである。「世間体」が悪いということである。

問5 (1) 「馬のはなむけ」は、「旅立つ人の道中の安全を祈って、贈り物したり、送別の宴を催したりすること。」「という意味。「八木のやすのり」は、「贈り物」を持参したわけである。

(2) 線 の直前にある「心」に着目する。この「心」は「真心。誠意」などと訳すことができる。『土佐日記』の作者は、明らかに「八木のやすのり」という人物を評価しているが、それは贈り物をもつたからではないと述べている。どんな理由で評価するのは、直接的には述べられていないが、「心」から察することができる。